

『新緑を訪ねて： 奥入瀬溪谷』

## 八甲田・奥入瀬山行（平成 30 年 6 月 24 日～27 日）

昨年 12 月の忘年例会で、6 月の「大人の休日倶楽部 パス」の割引期間中に「酸ヶ湯温泉、奥入瀬溪谷」の散策を提案したところ、三浦さんが計画をして下さることになった。この期間中は酸ヶ湯温泉も混むが、三浦さんは数日後には酸ヶ湯温泉と“秘湯”という谷地温泉に宿泊を確保した。

若干出入りはあったが、最終的には 8 名の参加が決定した。三浦（L）、陽田、神田（玲）、天野、中島、松山、伊藤（宏：Guest）、池田（み：Guest）。三浦さんは早速 1 ヶ月前の日に列車の予約を入れたが、当初の予定の列車は既に満席でとれず、10 時 44 分発「はやぶさ 17 号」新青森 13 時 58 分着になった。宿泊の谷地温泉のマイクロバスが迎えに来てくれるので、新青森駅前に 14 時 10 分までに集合する。他の人達はそれぞれの考えで、早い列車で青森市内観光をするとかにした。一方、三浦、天野、中島、伊藤（宏）の 4 名は、座席は少し離れていたそうだが、譲ってもらって合流して“車内第 1 次会”を開催したとか。

今は薄曇りで少し日差しもある。14 時丁度に全員集合して、無事谷地温泉の迎への車に乗り込んだ。車は青森市内から国道 103 号線を走り、萱野高原→県道 40 号線→田代高原→国道 394 号線→谷地温泉と進み 15 時 20 分に到着した。夕食までの時間、宿の付近を散策した。目の前に小さな木製展望台があり、そこから「谷地湿原」が望める。向うの方に橙色の花が見えたので、湿原に入ってみようと道を探したが見つからない。三浦さんは強引にやぶこぎして入って行った。宿で訊いたら湿原保護のために道はつけていないと。宿前から後方の高田大岳の方に登る道があり、小散策回遊路があった。「谷地の森遊歩道」と。タニウツギ、珍しいギンリョウソウを見つけた。散歩道の奥に硫化水素の出る「温泉のわく沼」があった。

谷地温泉は「日本三秘湯」という。他はニセコ薬師温泉（閉館中、入浴可）、祖谷温泉（徳島県）だ。冬季でも自家用車なら来ることができるのに、何故“秘湯”かと推測するに“携帯が通じない”からではないだろうか。

浴室は木製だが、青森ヒバか桧かは判断できなかった。湯船は 2 槽あり、「霊泉」と呼ばれる「下の湯」約 38 度 C と白濁の「上の湯」約 42 度 C である。始めに下の湯で 30 分位ゆっくり入った後、上の湯には 5～10 分入るのだそう。単純硫化水素泉なので、効能は広く神経痛、リュウマチ、皮膚病、アトピー、胃腸病、糖尿病、高血圧症、婦人病などなど。ただし長期滞在が必要か？

待望の 18 時からの夕食では、刺身もあったがイワナの塩焼き、根曲り竹、きのこなどの天ぷら、ワラビ、蕨の酢の物、ホタテとウニの吸い物など、なかなかであった。勿論食事中には本日第 2 回目の反省会が開催されたのは言うまでもない。19 時半に食堂を追い出されて部屋で第 3 回目の反省会。何故か女性陣は参加されなかった。多分反省することが無かったのでしょう。22 時過ぎにようやくお開きになった。

翌 25 日は待望の八甲田山登頂の日。朝食を 7 時から 30 分位で済ませ、9 時の出発に備えて準備する。天候は少し青空も見えてまあまあだが、風が心配だ。八甲田山頂上で風速 25m/s を超えるとロープウェーが動かなくなってしまう。今は 15m/s 位とか。宿の車で八甲田山ロープウェー下駅まで送ってもらう。国道 103 号線で北と南の八甲田山の間を西進し、笠松峠を越えて酸ヶ湯温泉の前を走る。約 25 分で八甲田ロープウェー下駅に到着。直ぐにロープウェー（約 100 人乗りの大型ゴンドラ）に乗り込み 10 分で海拔：1300m の上駅に到着した。高度差 650m をたった 10 分で登ってしまった。

頂上直前までは雲・霧は無かったが、駅周辺から霧が立ち込めていた。予報では段々良くなると。ここで三浦山行組と散歩組に分かれた。霧の中だが、雨に備えて全員雨合羽を着る。三浦組はゆっくり用意をして 9 時 45 分に出発していった。今日帰らなければならない天野さんと小生も“天空の散歩”に出発する。丁度ボランティアで案内してくれるおじさんが居たので、色々話が聞けるだろうと“1 時間コース”をお願いした。一組のご夫婦と一緒に、田茂菴湿原を一周した。

“ネイチャーガイド”鎌田さんは周りの山々や花、明治 35 年の“雪中行軍”の悲話などを教えてくれた。ナナカマドの木が“備長炭”なるということは初めて知った。いろいろな花が咲いている：白色：マイズルソウ、ゴゼンタチバナ、チングルマ（終りに近かったが）、イワイチョウ、ミツバオウレン、コバイケイソウ、ツルアジサイ、アカモノ、ナナカマド・・・赤色／桃色：イワカガミ、ミネサクラ、・・・青／紫色：スマレ、ギボウシ、・・・・。ただ白山石楠花はまだ蕾だった。

田茂菴湿原を展望台から眺め、宮様コース分岐で赤倉岳、井戸岳、大岳方面（左手）と別れを告げて戻る。今はかなり雲、霧は上がってきているが、まだ三山の頂上付近は雲の中、時々ふっと頂上が見えることがあった。中央の道は毛無岱へ下る道だ。この道は酸ヶ湯温泉へそのまま下る道で「毛無岱湿原」はまた素晴らしい（筈）。同行者がいればここを下りたかったのだが。秋の紅葉の頃にでも来られればよいが。湿地から 30m ほど登って田茂菴岳（1324m）頂上に出る。ここから田茂菴湿原への眺望は良かった。最初の展望台で昼食・休憩を摂る。

天野さんの青森行きバスは約 15 時なので、山の上でゆっくりしましよと言っていたのだが、13 時頃にバスがあると勘違いして、急に山を下ろそうと言い出した。慌てて駅に行き 12 時 20 分のロープウェーに乗った。小生のほうは 12 時 47 分に酸ヶ湯温泉へ行くバスがあるのでよかったが、天野さんは結局下の食堂辺りで 15 時まで待つことになった（らしい）。

小生は酸ヶ湯温泉に行ったが、まだ 13 時なのでチェックイン時の 15 時まで、日帰り客が利用する待合室で待った。窓の外を見ると雲は切れて早く流れて行く。明日は好天気が期待できるだろうか。部屋は自炊棟の方だった。継ぎ足し、継ぎ足しの建物なので分かりにくい。谷地温泉では 10 畳に 6 畳の次の間付きだったので十分だったが、今日は 8 畳間に 4 人なので少し狭い（勿論山小屋の 1 畳 2 人よりはよいが）。

さあ、「ヒバ千人風呂」へ行く。この“ヒバ”は日本三大美林の「青森ヒバ」で、浴室・浴槽を作っている。湯船は 2 槽あり、41 度 C と 43 度 C と泉質はやはり単純硫化水素泉で白濁している。（他に冷泉、瀧泉がある。）この 2 槽にすし詰めにしても 200 人位が限度ではないか。この風呂は“混浴”だ

が、20時～21時と朝8時～9時は女性専用となる。浴室の向う側の女性入口近くに目隠しの衝立があり、浴槽全体の約半分に←男性 | 女性→の棒が立っている。湯加減などをみる宿の人が居て、女性側に少しでも入っていると注意して動かしていた。アラフォーの女性が一人、くすんだ緑色のワンピース（化繊か肌には付かない）を着て衝立のこちら側に入ってきた。この衣類は売店に¥1,000で売っているそうだ。隅の方に白いタオルの若そうな女性3人がいたが、こちらには来ないで出て行った。

三浦組は17時少し前ほぼ予定通りにご到着。山の上は風がかなり強かったが、それで霧が追い払われて周りの素晴らしい眺望を楽しんだと。結構残雪が残っていて歩くのに苦労したこともあったという。仙人岱の辺りで、酸ヶ湯温泉から登ってきた夫婦でご主人が“もう歩くのはいやだから、タクシーを呼べ！”とのたまわっていたと。少し冗談もきつい。食事は18時からなので早速入浴にいったが、帰りに迷子になったと。

夕食は広い食堂だが我々自炊組は隅のほうの少し薄暗い場所。食事内容は昨日の方がよかった。食堂での第？回目の反省会は盛り上がった。部屋へ戻っての反省会では女性陣も加わり、話に花が咲いた。“かもじ”の話、加山雄三はあれは絶対鬢だ、染めだけであんなにふさふさしない、とか、白髪染を使っていると何時止めるかが問題だ、・・・中島さんはさだまさしに似ている、誰かさんは”渡る世間は鬼ばかり”の中田喜子さんに似ていると言われたとか、三浦さんの体力の源はTVを見ている時でも、鉄壺鈴を持ったり、脚の運動をしたりして、無駄な時間を過ごさない、など・・・・・・。残雪の上でタクシーを呼べという話もここで出たのかな。

第3日目、26日は「ビュッフェ式」の朝食、6時45分からだったが、10分ほど遅らせて食堂に行くと、まだまだ行列が長かった。もう少し遅くてもよかったが。人が多く席がない。お盆に食事を載せてあちこちうろうろする始末だった。結局ばらばらに座って食べることになった。事務掛りの小生が失敗したのは、昼の弁当をどうするか決めていなかったこと。どこかの売店でおにぎりなどを買うか、少し遅くなるが休屋でソバ屋などに入るかとなり、皆さんにおまかせすることになった（申し訳ありませんでした）。

天候は少し雲があるが薄日もさし、まあまあのお天気だ。松山さんは青森在住のお友達に会いに行くとかで、ここでお別れして、我々をお見送りいただいた。（後日談：松山さんも翌日種差海岸へ行かれたとか。）酸ヶ湯温泉前から9時20分発の路線バスで奥入瀬溪谷へ向かう。バスは10分ほど遅れて到着したが満員で、後続に臨時車が付いてきた。待っている時、年配のご夫婦がいて、ご主人が根曲り竹、すかんぼ（イタドリ）、よもぎ、露の効用などを教えてくれた。このご主人小型のキャリーバックを引いており、奥さんはリュック、そして葛温泉で降りて「奥入瀬を歩きます」と言って、葛温泉からのバス道路を下って行った。最後に我々がバスで17時35分に八戸駅に着くとそこでまた奇遇？にも会った。

バスは昨日の道を引き返す形で走り笠松峠（青森トド松が笠に似ているからと）を過ぎると、道の両側に自動車が沢山停まっている。100台位は停まっていたらうか。皆根曲り竹やワラビなどの山菜採りの人だろう。タニウツギ、ナナカマド、山ボウシなどの花が咲いている。猿倉温泉を過ぎる辺りからうっそうとしたブナなどの高木の林の中に入る。いたる所にヘアピンカーブ、S字カーブが続

く。この辺は「八甲田・十和田ゴールドライン」という。秋の紅葉が綺麗なのだろう。10時に葛温泉到着。約10分休憩。ここは大町桂月が晩年を過ごした宿だという。葛川沿いにしばらく走ると、奥入瀬川に合流し、バスは十和田温泉郷、焼山を経て10時32分に「石ヶ戸」に着いた。

準備を済ませてイザ出発だが、三浦さんの初めの計画では、写真を撮りながらでは時間が足りないので、大幅に計画変更で“とにかく休屋15時20分発 八戸行バスに乗ること”と決めた。皆さんそれぞれお昼用に軽食を調達されたようだった。10時40分出発。

「石ヶ戸」は大きな柱状節理の石がトドマツの木に寄りかかり、下に空間が開いていて“門”のように見えるところから名付けられたか。蛇行する流れに沿って喬木の林の下の道を歩く。すぐ「馬門岩」(マカドイワ)が現れた。これは溪谷の両側に柱状節理の巨大な岩が迫っていてあたかも門の様相をしているからだろう。他の場所はずっと上流まで幅は割合広いが“U字形”の溪谷をなしており、岩は柱状節理である。流れは比較的緩やかだが、「石ヶ戸の瀬」、「阿修羅の流れ」、「飛金の流れ」などの早瀬が続く。道は時々橋を渡り左岸に行ったり、右岸にいたりする。

馬門橋に来たときには既に11時30分になっていた。まだ全体の4分1程度。12時、「千筋の瀧」、ここで十和田市役所の広報車が「付近でクマが発見されたので注意してください。」と走っていった。雲井の瀧の上流で見かけたらしい。12時40分「雲井の瀧」到着。国道のすぐ奥にある。高さ20m、3段の瀧で立派な瀧だ。溪谷の道に戻り、「白布の瀧」(素面の瀧!)を見る。この瀧は柱状節理の岩を流れ落ちる。「白銀の流れ」を過ぎると流れは少し緩やかになったような気がする。

13時40分、雲井の流れバス停を通過。これでもう休屋まで行く時間が無くなった。14時「玉簾の瀧」だがこの瀧は上の方の国道の上から落ちているので見つけ難かった。この水が直径45cm位の土管で道路の下を通って流れていたのも、土管から落ちるのが“瀧だ”と。ここにベンチがあったので、ようやく休憩・軽食による昼食を摂った。

14時22分~29分、溪谷の両側に「一目四瀧」の「白絹の瀧」、「白糸の瀧」、「不老の瀧」、「双白髪の瀧」(トモシラガ)を見る。「九段の瀧」を過ぎて、14時50分ようやく「銚子大瀧」に到着した。この瀧は本流の瀧で高さ7m、幅20mの立派な瀧だ。今日の行程は約7.5kmだったが、写真を撮りながらなので、大幅に時間超過した。しかし良い溪谷歩きだった。

国道に出てバス停を探すけど見つからない。そこに居た八戸タクシーの運転手にバス停の位置を訊いたが知らないという。驚いた。手分けして下流側と上流側を探したら約150m上流側にあった。もう15時なので休屋どころではなく、30分後に帰りのバスが通る。銚子大瀧で記念写真を撮ってから八戸行バスに乗り込んだ。途中一か所道の駅で休憩停車後、定刻17時32分に八戸駅に到着。駅でそれぞれ30分ほどの待ち時間があり、そのまま東京へ帰る伊藤、神田、池田さん3人と追加一泊の三浦、中島、陽田の3人組とに別れた。

居残り組は18時22分八戸発で19時00分種差海岸駅に到着、駅前1分の民宿「宝海荘」に入った。部屋は変形5角形15畳間なので3人ではゆったりだった。夕食は新鮮な“魚尽し”で、厚身のホタ

テ、脂ののった白身魚の煮つけ、大型のエビ・ハマチの刺身、新鮮なホヤの酢の物、小型イカの姿煮など十分満足した。

第4日目、27日は朝から霧雨が降っているが、リュックは宿に置き雨合羽を着て種差海岸へ散歩に出る。正式名称は「三陸復興国立公園 種差海岸」という。宿から1分で、「種差海岸」の緑の天然芝生に出る。若干の起伏があるが、広々として気持ちが良い。7月8日（日）にお祭りがあるので、芝生が綺麗に刈り込まれていた。芝生の海側には大きな岩がごろごろしていて、これがまた良い景観を与えている。芝生縁にはニッコウキスゲ、ヒオウギアヤメ、ハマナス、ツリガネニンジンなどが咲き、またウミネコが猫のように鳴いている。芝生を歩いて「淀の松原」などを過ぎて、深久保漁港手前で宿に戻った。

宝海荘で荷物を受け取り、11時02分発の列車で本八戸へ。ここの「八戸屋台村 みろく横丁」に行ってみようというのだ。駅から歩いて約15分、街の中心繁華街の中にある。「三日町」通りと「六日町」通りを結ぶ横丁なので「みーろく」と言うそう。みな6~7人きり座れない小さな固定式の屋台である。今は丁度昼時だが、ここは夕方からの開店なのだろう、みな閉まっていた。横丁入口に「通り抜けると開運します」、反対側出口には「開運しました」という立木の標識が立っていた。やむをえず我々は近くの居酒屋「弁慶」に入る。海鮮丼と泡付飲料で喉をうるおした。魚はやはり新鮮で美味であった。

13時56分の八戸行きで、八戸駅に戻り新幹線の切符を探す。最も早い時刻の列車は満席で1時間半後の臨時列車の切符が取れた。お土産買いで時間をつぶし、15時41分発「はやぶさ60号」で東京へ。18時半に東京駅に着き三浦さんとお別れした。

今回は三浦さんの綿密な計画で、“秘湯 谷地温泉”、八甲田山、奥入瀬溪谷散策と種差海岸を楽しむことができた。八甲田、奥入瀬は新緑の季節も良かったが、秋の紅葉の時期も素晴らしいだろうと思う。また「毛無岱」も歩いてみたいと考える。 ああ！4日間の“涼しい非日常”から“蒸し暑い日常”に戻ってきてしまった。

以上 陽 田